

Interview #07

*2025年3月インタビュー

2025年3月所属：環境学研究科 社会環境学専攻
(名古屋大学融合フロンティアフェロー)
2025年4月所属：シンクタンク・コンサル



環境学研究科 近藤 悠生 さん

これまでやってきた研究の概要を教えてください

環境学研究科で、気候変動問題に民間の金融機関や投資家がどのように貢献できるかを研究していました。さらに、気候変動問題の被害を受けやすい発展途上国において、民間の企業や銀行がどのように支援できるのかという点も深掘りしました。研究手法は文献調査やインタビューに加えて、金融機関が公表する資料を機械的にテキスト分析することでもしていました。分野は国際政治学に分類されます。

この春からはどういう仕事をする予定ですか？

春からシンクタンク・コンサル系の企業に就職します。気候変動や生物多様性といった環境分野以外にも、人権保護・人的資本といった社会的な分野も含みますが、国や企業などから調査やコンサルティングの依頼を受ける形です。文系博士だと、自分の専門性をダイレクトに活かせる企業がなかなか見つからず、アカデミアを検討する人も多いです。シンクタンクでも、分野を問わず全般的に扱う企業が少なくない中、今回、私のこれまでの研究と親和性が高い企業と巡り合えたのは非常に運が良かったと思っています。

就活の流れや、キャリアに関する考え方は？

まず、就活はかなり早くから意識していました。自分が博士号取得後に何をしているか、どこに住むのかを決めておかないと不安な部分はあったので、前半は研究だけでなくキャリアパスについても積極的に自ら動きました。内定をいただいてからの博士課程後半では研究活動に思い切り集中できました。情報収集にあたっては、リクナビ・マイナビなどのサイトに加えて、博士学生専門の就職活動支援サイトも活用し、さらに自分で「環境に関する調査・コンサルティングを委託できる会社」などと検索し、その企業に連絡を取ったりもしていました。そんな中で見つけた企業のインターンに参加し、採用選考に進み、内定を頂くという形でした。アカデミアを検討した時期もありましたが、研究成果が社会・経済に反映されるまでのタイムラグへの不満や、実生活へ馴染みやすい形での研究調査に関わりたいという考えが強かったです。そのため、ある意味でアカデミアと企業の間のような位置づけのシンクタンクやコンサルを目指していました。

キャリア形成にあたって活用したこと、在学中に経験してよかったことを教えてください。

シンポジウムのリーダーを務めたり、中部地方の環境団体に所属したり、大学内でイベントを開催したり、といった学外の活動は自分の中で大きな経験だったと思います。研究者だけでなく、大企業に務める人や起業家とのコミュニケーションもあったので、仕事を紹介してもらったり、といった博士ならではの情報交換がありました。研究活動一本ではないという意味で、精神的にも安心感を持って就活できたと思います。もうひとつは、キャリア教育室主催の「体験型ワークショップ」や、「企業と博士人材の交流会」に参加したのも良い経験でした。博士向け採用イベントに参加しても、企業は理系学生を優先するイメージがありました。しかし、実際に自分の研究内容を話すと、興味を持ってもらえました。自分の専門性を、企業においてどのように活かすことができるのか、逆に、活かせるはずだと思っていたけど実は活用しにくい部分を事前に擦り合わせてきて興味深かったです。文系博士でも営利企業で活躍できるという実感を得られたので、企業との交流イベントはひとつの重要なきっかけだったかもしれません。

就職活動で評価されたであろうと思うことはありますか？

私の場合は主体性・リーダーシップといった点を評価していただいたようです。環境団体への参加や、イベントの企画運営をした経験が、就職活動でポジティブに評価されたのだと思います。

後輩たちにエールをお願いします。

まず伝えたいのは、世間で言われているほど博士の就活状況はひどくない、ということです。もちろん分野やテーマによっては厳しい現実もあるかもしれませんが、事前に情報を集めて主体的に行動していくことでキャリアパスは開くことができます。特に文系博士はひとりでコツコツと研究を進めるイメージが強いですが、研究に加えてもうひとつ自分の中に軸となる活動を持つことをおすすめします。社会とのつながりを持てる団体や学会、イベントに積極的に参加することで、視野が広がり、精神的に安定し、さらに就職活動での強みになったり、採用情報を知るきっかけになったりもします。実は、私は学部卒、修士卒の両方のタイミングで就活をしていました。内定も貰っていたのですが、自分の中で「環境分野が専門です」と胸を張って言えず、悩んだ末に進学を選んできました。結果的に、博士課程を通じて専門的な人材と呼ばれるような成長を遂げることができたように思います。研究したいことがあるのであれば、ぜひ博士課程に挑戦して欲しいです。